

# 日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立 —明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(7)—

## The Formation of “Shoka” as a Source of Japanese “poem” —A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State”(7)—

大本達也\*  
Tatsuya OMOTO

### Abstract

In this paper we will examine the publication process and the contents of *Shogaku Shoka Shu* (*Song books for the elementary school*, 3vols. 1882-4). The “Shoka”, which are songs for school children, had an impact on the formation of Japanese “poems”. In chapter 1 we will assess the publication process of those books. In chapter 2 we will categorize and investigate the words of Shoka into 4 groups:—lyricism, moralism, patriotism and militarism

キーワード：小学唱歌集、蝶々、蛍の光、音楽取調掛、田中不二麿、伊沢修二

### 序論

本論は、「明治期における『文学』の形成過程をめぐる国民国家論—「国語」または《出版語 print-languages》の創造と「小説」の台頭—」（『CAMPANA』10号 2003）を総論とする各論4にあたる。

明治期において、欧米の影響を受けて、いわゆる「近代詩」が形成されたが、その源流のひとつに唱歌がある。国民の愛唱歌として広く普及した唱歌は、直接、間接に詩作に大きな影響を与えた。直接的な影響としては、大正期において、『赤い鳥』を中心とした「童謡」運動が唱歌を踏み台として起こったことがよく知られている。斉藤勇はこう述べている。

---

\*本学非常勤講師、近現代日本文学・思想（Japanese Literature in 19-20<sup>th</sup> Centuries）

明治 20 年代の青年詩人、すなわち、明治詩壇の主潮をつくった人々に対して、作詩の刺激を与えたものは、明治 15(1882)年初版の「新体詩抄」ではなく、「新撰賛美歌」その前年から出はじめた 3 冊の「小学唱歌集」、ならびに森鷗外など新声社同人の訳詩を集めた「於母影」……であろう。[斉藤:118]

山住正己も指摘するように、『小学唱歌集』は《日本人の詩歌にたいする感受性・態度・考えかたをつくりあげるうえで》、最初の近代詩集とされている『新体詩抄』よりも《はるかにつよい影響力をもっていた》のである[山住:79]。

本論では、『小学唱歌集』の成立とその内容について論じる。まず、1 で文部省がどのような意図を持ち、どのような経緯でこの唱歌集を出版したのか、その過程を検討する。次に、2 において唱歌集におさめられた唱歌を 4 つのグループに分けて、その内容について分析する。

なお、文中、引用は《 》で、出典は [ ] で、大本による注釈は ( ) で示した。引用については、旧漢字を常用漢字に改める、難読字にルビを付す、唱歌引用の底本として伊沢修二(1971) 山住正己校注『洋楽事始』(平凡社)を使うなどして、読みやすさに一定の配慮をした。

## 1. 文部省と唱歌

1871(明 4)年、大学が廃止され、文部省が設置されることで、教育行政は教育機関から独立する。文部省はすぐに、学校ネットワークの整備を始め、翌年には学制を敷く。全国の学校がほぼ整備されるのは、1889(明 22)年の学校令まで待たねばならないが、ともかくもここに本格的な国民教育がスタートする。

高等教育はお雇い外国人でまかなうことができるが、初等教育には日本人教員が欠かせないのは言うまでもない。そこで、とりわけ急がれたのは小学校教員の養成である。文部省は学制施行の年、東京に師範学校(後の東京高等師範学校)を設置、翌年、大阪、宮城、翌々年、愛知、広島、長崎、新潟、そして、東京女子師範学校と急速に師範学校を増やしていく[中村洪:526]。

音楽教育については、学制が敷かれたことにより、下等小学に「唱歌」、下等中学に「奏楽」という教科が誕生したが、それぞれ「当分之ヲ欠ク」とされた。これは、中村理平が指摘するように、文部省当局の怠慢から生じたのではなく、欧米諸国にならって教育制度を導入したものの、音楽については《教育科目としての具体的な研究実績》がないこと、そして《特殊技術を必要とする科目を教場で授ける方策》を持たなかったことが原因であったのだろう[中村理:458]。実際、学制の開始時の日本において、5 線記譜法を解読でき

るのは《陸海軍のラッパ手と軍楽隊員》に限られていたのである[同:462]。音楽教育については、教科書どころか教員のあてさえつかない状況だったのであり、こういった状態は以後しばらく続く。

1874(明 7)年、神田孝平(1830-1898)が『明六雑誌』第 18 号に「国楽ヲ振興スヘキノ説」を発表する。蘭学者・神田は、幕府の蕃書調所から維新後、政府の 1 等訳官となり、当時は兵庫県令(知事)として活躍していた。この論文で神田は、こう述べている。

「今之ヲ振興センニハ第一音律ノ学ヲ講スヘシ音律ノ学ハ格致ノ学ニ基キ別ニ一課ヲ為シ音ニ從テ譜ヲ作り譜ヲ案シテ調ヲナスノ法ナリ此法支那ニハ略ホコレヨリ欧米諸国ニハ殆ト精妙ヲ極ム只我邦ニ未タ開ケス今之ヲ講スルハ我欠ヲ補フ道ナリ」楽器ハ和漢欧亜ヲ論セス最モ我用ニ便ナル者ヲ撰ムヲ可トス」楽章ニ至テハ外国ノ者ハ用ニ適セス内国ニ行ハルハ者亦タ適ト覺シキ者ナシ止ムヲ得スニハ觀世ナリ宝生ナリ竹本ナリ歌沢ナリ姑ク現今衆人ノ趨ク所ニ從ヒ稍々取捨テ加ヘ音節ヲ改メハ可ナラン」到底我邦ノ楽章ニハ脚韻ナキヲ以テ聴ク者ヲシテ大ニ感發セシムルニ足ラス衆人追々支那欧亜ノ唱歌ヲ聴キ韻脚ニ一段ノ妙趣アル事ヲ知り得ハ其趣ニ倣ヒ邦語ヲ以テ新曲ヲ製スルコト亦難カラサルヘシ」余嘗テ謂フ外国技芸採用スルヘカラサル者ナシ特ニ唱歌ノ法外国ノ儘用フヘラス新曲ノ製ノ止ム可カラサル所ナリ」[山住:26-7]

神田の主張は、これからは、まず音楽教育を始めるべきだ、それは、中国や欧米では記譜法が発展しているが、日本ではいまだになく、それを補うためにも教育が必要だからである、楽器については日本、中国、欧米のもの、何を用いてもかまわないが、歌詞については、日本のものを用いるべきだ、やむを得ない場合は、能や文楽のものなど世間で行われているものを改作して使えばよいが、日本の歌詞には脚韻がないため、どうしても感銘を与えにくい、唱歌については外国のものをそのまま使わず、新曲を作るほかないだろうというものだった。神田は明治の早い時期において、音楽教育の必要性を提唱するのみならず、新曲を作ることをも提唱しているのである。

さて、明治初期に教育行政官として手腕を振るったのは田中不二麿(1845-1909)である。文部省の最高職は文部卿であったが、当時、この役職には空席が続いた[中村理:459]。そのため、設立の年から教育行政部を去る 1880(明 13)年まで、田中が《文部省の実質的な最高実力者、かつ省務推進者》であったと中村は指摘している[同]。教育における音楽の重要性を認識し、音楽取調掛を発足させるのはこの田中なのである。

尾張藩士の子として生まれた田中は、尊皇攘夷派として幕末を過ごす、維新後すぐに大学御用掛に任命され、文部省が設立された年から 1873(明 6)年にかけて、文部理事官として岩倉使節団に随行する。一行は訪問先で様々な音楽に接することになる。奥中康人の

分析によると、久米邦武（1839-1931）の『米欧回覧実記』の記述から、最も多かったのは外交儀礼の音楽であり、次いで学校や軍隊にかかわる音楽であつたらしい[奥中:51]。さらに、奥中は《文明国には愛国心、および愛国心を誘発するナショナルミュージック〈国民音楽〉が必要》であるといった認識が『米欧回覧実記』から読み取れると指摘している[同:85]。田中が新興国家における音楽教育の重要性を認識したのがこの欧米体験であつただろうことは想像するに難くない。

1874(明 7)年、文部大輔となつた田中は教育施設の整備に着手する。女子師範学校設立の、翌年には付属幼稚園設立の建議書を提出、いずれも認可される[中村理:466]。田中はこの年、第 1 回文部省留学生として、留学経験のあつた目賀田種太郎（1853-1926）を留学生監督とし、伊沢修二（1851-1917）他を米国に派遣する。《師範学科取調のための人材が海外へ派遣されるのはこれが初めて》であつたが[中村洪:531]、まさに《この政策が近代日本音楽教育発祥への出発点となつた》のである[同:466]。

ところで、同年発行の『文部省雑誌』第 3 号にはドイツ語論文「愛国心ノ教育」が抄訳されている。

愛国ノ唱歌ヲ選ヒテ之ヲ教授シ且之ヲ謡ハシム可コト何レノ国ニ於テモ豪傑ノ士ト称ス可キモノ有ラサルハナシ有レハ則其人ヲ賞賛スルノ詩歌アルヘシ是等ノ歌ハ士氣ヲ作興シ心思ヲ振起スルモノニシテ兒童ノ好ヲ学ハント欲スル所ナリ又此歌ノ作ル所以ノ記伝ヲ説話スレハ更ニ一層ノ感覺心ヲ起サシム故ニ其歴史上ニ関スルノ日ニ至リテハ必是等ノ歌ヲ謡ハシム可シ以上掲クル所ノ箇条ハ愛国心ヲ教育スルノ提案ナリ[同:464]

この論文では、《愛国心ヲ教育》するために《愛国ノ唱歌》を教授することの重要性が説かれているが、当時すでに、愛国心涵養のために唱歌を作成するという政策が文部省内で具体的に検討されていた可能性は高い。

1876(明 10)年、神田は元老院議員を経て文部省に入り文部少輔となる。当時、文部卿は空席であり、文部大輔・田中に次いで、神田は《実質上、文部省でナンバー 2 の職》に就くこととなつた[尾崎:262]。田中が明六社に参加していたことから、おそらく神田は田中の懇望により文部省に呼ばれたのだろうと尾崎護は推測している[尾崎:263]。田中より 15 歳年上の神田は、文部省において顧問的な働きをしていたと考えられる。中村が指摘するように、神田が「国楽ヲ振興スヘキノ説」で唱えた考えが、音楽取調掛の《内外律音の異同研究》《俗曲改良》《国楽創設》などの方針に影響を与えたことは間違いないだろう[中村理:465]。

この年、アメリカ建国 100 周年を祝うフィラデルフィア 100 年期博覧会を視察するため田中は渡米する。この博覧会のテーマが「教育と科学」だったため[奥中:135]、田中は見

ておく必要を感じたに違いない。視察の結果、田中は、滞米中の目賀田らに各州の憲法条項および学校法を翻訳するように指示し、翌年、その成果は『米国学校法』として出版される[同:134]。田中も帰国後、2巻本の『米国百年期博覧会教育報告』を出版している。こうした努力もあり、教育における音楽(唱歌)の必要性に対する理解が、文部省から全国に広まり始めたのはこの頃からだと田甫桂三は推測している[田甫:13]。

ところで、この博覧会場で日本の使節団は、音楽教育家ルーサー=ホワイティング=メーソン(Luther Whiting Mason 1818-1896)と出会う。以前から音楽教師を探していた日本政府筋は、すでにメーソンを推薦されていたらしく、メーソンのほうも日本行きに興味を抱いた可能性が高いと中村は指摘している[中村理:483]。偶然かどうかはともかく、博覧会場に展示してあった自分の音楽掛図を撮影していたある日本人とメーソンは出会う[手代木:147]。掛図とは、アメリカの初等教育でチャート(Chart)と呼ばれる軸装の図表で、壁に掛けて児童の学習を助ける教具である。メーソンと出会ったのは使節団の一員であつたらしい。結果、田中は——贈呈されたとも言われているが——メーソンの掛図を入手する。後に、このメーソンの掛図をモデルに、日本でも教具としての「唱歌掛図」が作成され、さらに、掛図を元に『小学唱歌集』が刊行されることになる。

ここで、文部省主導ではない独自の唱歌教育の動きにも触れておきたい。

まず、最初の組織だった唱歌教育は、1877(明10)年、東京女子師範学校付属幼稚園で始まった。ここで歌われたのは、いわゆる「保育唱歌」で、曲には雅楽を用い、歌詞は和歌を素材として同幼稚園の保母が作詞または訳詩したもので、100曲ほどが現存している[山住:17-19]。たとえば、「花見之駒」は《かすみたち、やなぎけふりて、ひばりなき、すゝきはなさく》といった調子で、幼稚園児の遊戯には縁がない歌詞だった[同]。

また、学校において初めて唱歌教育をはじめたのは京都女学校である。この女学校編の『唱歌』は1編が1878(明11)年に、2編が翌々年に発行されている。当時、週3時間、「絃歌」(後に「箏曲」)の授業があり、その教科書として用いられたのだが[澤崎 170-1]、筑紫箏を用いて[山住:15]、地歌の旋律を歌う授業であつたらしい[同:171]。2編の「序文」に《身を修め家をとゝのふる道にすゝましめん》とあるように、この授業は貞徳教育が目的であつた[江崎:「唱歌〈2篇〉」1]。そのため、歌詞は教育的な内容に改良されている。たとえば、1編冒頭の『出雲曲』は、前半に《八雲たつ…やへかきつくる》の古歌を用い、後半にこの歌は《我くにふりのまこころのはしめなりけれ》とつなげ[江崎:「唱歌〈1篇〉」4]、夫婦間のまごころの大切さを強調する内容となっている。他にも、帝の治世を祝う歌や儒教道徳的な歌が並んでいるが、時代を反映し、先進文明を積極的に取り入れるべきだとする歌もみられる。

このように、「保育唱歌」や京都女学校『唱歌』は、時代の風潮を先取りしたものであつたが、後世に引き継がれることはなく、後の詩作に影響を与えることもなかった。

さて、文部省での動きに戻ろう。1878(明 11)年、在米中の目賀田と伊沢連名の「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二見込書」および目賀田の「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込」が提出される。同年、帰国した伊沢は、東京大学において「唱歌奏楽ハ教育ノ為メニ欠ク可ラサルヲ論ス」という講演を行う。ここで、伊沢は唱歌奏楽の効用は、《身体上》、《心神上》の両方にあり、欧米各国においては、《学校内必須ノ要具トナレルニ至レリ》とし、《俗間ニ行ハル、所ノ音曲ノ類》は《断シテ之ヲ子女学習ノ場ニ上ス可ラス》と強い調子で当時の俗曲を退け、《洋風音曲ノ如キ》もそのまま用いることができないとし、《新タニ一種ノ音曲ヲ製作シ以テ学校定歌ノ事業トナスヘキ》であると主張している[中村理:485-6]。中村理平は、この講演に神田の国楽振興論の影響を見ているが[同:486]、神田の主張を受けたと思われる新曲を用いての音楽教育という路線は、単に伊沢の意見であるというよりは、すでに文部省における合意事項であったと考えられる。

翌 1879(明 12)年、「教育令」において「各府県ニ於テハ便宜ニ随ヒテ公立師範学校ヲ設置スヘシ」とされ、各府県への師範学校設置が義務付けられた。さらに、「小学校ハ……土地ノ情况ニ随ヒテ野画唱歌体操等ヲ加ヘ……」と記されたが、《欧風唱歌教育を実践し得る小学校はまだ一校もなかったのが実情》であった[中村洪:527]。けれども、この年、目賀田、伊沢の見込書を受け、音楽取調掛が発足する。東京師範学校長だった伊沢は音楽取調御用掛を兼任する。

着任後に提出された「音楽取調ニ付見込書」にはこうある。

現今ノ要務トナストキハ実際取調ブベキ事項ハ大綱アルベシ。曰ク、東西二洋ノ音楽折衷ニ着手スルコト。曰ク、将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事。曰ク、諸学校ニ音楽ヲ実施シテ適否ヲ試ル事。[上沼:96]

ここからは、伊沢が文部省の国策を忠実に履行しようとしているのが見てとれる。音楽取調掛の仕事は、音楽について調べ、学校用その他の唱歌楽曲を選定し、その《教方教則等》を調査することとされた[伊沢:115]。そのために《音楽伝習生》を置き、音楽の専門家として養成し、将来、取調掛の事業に就かせること、そして、東京師範学校の生徒に唱歌や楽器を教授し、小学校以下の教師を養成することとされた[同]。

音楽取調掛は国学系統に属する稲垣千頼(かい) (?-1913)らを雇い入れ、唱歌の歌詞制作に当たらせる。また、翌 1880(明 13)年、メーソンを招聘し、唱歌教育の指導との唱歌作曲に従事させる。目賀田や伊沢は米国滞在中にメーソンから音楽・唱歌の個人レッスンを受け、師弟関係でもあった。けれども、この年、神田は元老院、田中、目賀田は司法省への転任となり、3人がほぼ同時に文部省を去ることになる。それでも、中村の指摘するように、音

楽取調掛の設置を実現したのはあくまで田中ら《文部省首脳》であり、目賀田、伊沢はその《計画を具現するための実際的な業務》の遂行に成功したに過ぎない[中村理:487-8]。とはいえ、伊沢が、神田や田中により国策として導入された音楽教育を着実に発展させ、日本中に普及させることに成功したのも事実なのである。

次の年、伊沢は東京師範学校校長から音楽取調掛長に転任となり、音楽教育に専心することとなる。この年の「学校教則綱領」では、「小学初等科ハ修身、読書、習字、算術ノ初歩及唱歌、体操トス」とされながらも、いまだに「但唱歌ハ教授法ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ」とされていた。けれども、田中の建議により設立された東京女子師範学校において、皇后臨席の場で唱歌が披露演奏されることとなる。田中の建議により設立された学校が、まさに《わが国の音楽教育籃觴の地》となったのである[同:466]。

翌年、メーソンが帰国する。伊沢の報告書によると、メーソンが唱歌を教えた生徒数は、東京師範学校 135 人、同付属小学校 195 人、東京女子師範学校 101 人、付属高等女学科 101 人、同付属小学校 290 人、同付属幼稚園 166 人、学習院 155 人であり、合計 1143 人となっている[中村洪 587]。メーソンが教えたのは東京在住の学生だけであったとはいえ、師範学校の卒業生は全国各地の小学校に赴任するのであり、《新しい音楽教育の波》は《少しずつながら地方へ》広がっていくのである[同:587]。

さて、いよいよ《歌による国造り》を目的とした『小学唱歌集』が編集されるのだが[小川:44]、音楽取調掛が作った唱歌はそのまますんなりと認められたわけではなかった。山東功は初編の出版までの過程を 3 段階に分けている[山東:29]。まず、1880(明13)年 3 月から 12 月までの音楽取調掛における唱歌の選定過程、次に、12 月から翌年 4 月までの音楽取調掛と文部省との論争段階、そして、修正後さらに文部省からの修正要求があり完成する 1882(明15)年 4 月の出版までの 3 段階である。そして、第 3 段階の歌詞の修正によって大幅に出版が遅れた。そのため、「明14(1881)年11月刊行」と刻されているにもかかわらず[文部省:表紙]、初編が実際に出版されたのは翌年の 4 月であった。

修正要求はどのようなものだったのだろうか。山東は

過程全体を概観すれば、当初選定された歌詞の多くは花鳥風月を歌った雅文調のものであったが、第 3 段階に至って、文部省普通学務局から「徳性涵養ノ精神」を要求され、歌詞修正が多くなされたとまとめられる。[山東:29-30]

と指摘している。そして、その背景には 1879(明12)年に発布された「教学聖旨」があるという。これにより儒教主義的教育政策が強調されるようになり、『小学唱歌集』の編纂が行われたのがこういった国粹主義が勃興する時期であったため、それらが修正要求となったと考えられる[同]。

歌詞の原案となった歌詞は音楽取調掛の稲垣らが作ったものだが、初編の「緒言」にある《徳性ノ涵養》および《人心ヲ正シ風化ヲ助クル》という唱歌教育方針にあわせてそれらは改作された[伊沢:161-2]。現在に至るまで文部省は編集した唱歌について原則として作詞作曲者を明確にしていないことから[山東:66]、『小学唱歌集』に収められた曲は事実上、文部省作詞として取り扱われるべきものと言えよう。このように紆余曲折を経て1882(明15)年、『小学唱歌集』初編は刊行される。

## 2. 『小学唱歌集』について

伊沢は「音楽取調成績申報書」で、『唱歌集は、唱歌掛図中のものを取て之を冊子に刊行』したものであるとしている[伊沢:160]。このように、メーソンの掛図から始まった唱歌教材は、本来は掛図が主で、唱歌集が従であったのだが、現場では唱歌集のほうが歓迎され、広く使用されるようになった[山住:100]。

日本最初の諸学校向け音楽教科書『小学唱歌集』には、1882(明15)年発行の初編、翌年発行の第2編、さらにその翌年発行の第3編あわせて91の唱歌が収められている。第33までの33曲が初編に、第49までの16曲が第2編に、残りの42曲が第3編に収録されている。

それでは、『小学唱歌集』に収められた曲を、歌詞の内容から叙情性(lyricism)、徳育主義(moralism)、忠君愛国主義(patriotism)、軍国主義(militarism)の4つのグループに分け、その内容に考察していきたい。

第1に、叙情的な歌詞のグループを取り上げる。唱歌集全体を通じて、ほとんどの歌で叙情性が強調されているのだが、叙情性以外の要素が見られない歌がある。

唱歌集の冒頭には、自然を歌い、叙情性を強調した歌が並ぶ。音階練習のための曲とみられ、単調なメロディが付されている。第1「かをれ」では桜が、第2「春山」では山の美が、第3「あがれ」では四季の自然が歌われる[伊沢:164-5]。

以後も、こういった花鳥風月を歌う歌が多く並ぶ。歌詞はたとえば、第13「見わたせば」は、現行の「むすんでひらいて」のメロディがつけられていた歌で、《見わたせば、あをやなぎ、花桜、こきまぜて、みやこには、みちもせに、春の錦をぞ、さほひめの、おりなして、ふるあめに、そめにける》といったものである[同:170]。このように、ほとんどの歌詞は和歌を模し、七五調を用いて作られている。

人生を歌う叙情詩も登場する。たとえば、第52「なみ風」は《なみ風さかまく、青うなばらに、<sup>やみ</sup>暗じをたどれる、船人あわれ…命とたのむは、棹かちなれや》と航路に人生を重ね合わせる[同:222]。他にも第81「きのふけふ」は《きのうきょうと、おもいしを、春はすぎて夏来ぬ、かりはかえり、つばめきぬ、君はゆきてかえらず、かえれかえれかえれとく、あわれあわれわが友》など[同:256]、人の世の無常観を含む歌がいくつか見られる。



以上のような四季や人生を叙情的に歌うだけの歌詞が、初編から第3編まで合わせた全体の3分の1を占める。

第2は、徳育主義的な歌詞のグループである。

まず、学校で歌われるとあって、早起きや勉学を奨励する歌がある。第19「閨の板戸」では《あさいねする身の、そのおこたりを、いさむるさまなる、春のあけぼの》と、春の早朝、集う鳥、舞う蝶が朝寝を戒める様子が描かれる[同:178]。第68「学び」では《まなびはわが身の、光りとなり、富貴も栄花も、こころのまま》と出世のための学業が奨励される[同:242]。また、第90「心は玉」では《こころは玉なり、曇りもあらじ、よる昼勉めて、磨きにみがけ…学びし人は、ひかりをうけて、世をこそてらせ》と勉学による啓蒙が説かれる[同:274]。

次に、孝行や郷土愛を歌う歌がある。第22「ねむれよ子」では《ねむれよ子、よくねるちごは、ちちのみの、父のおおせや、まもるらん…母のなさけや、したうらん》と子に対する孝行への期待が歌われる[同:182]。第57「母のおもひ」では《ははのおもいは、空にみち、ゆくえもしらず、はてもなし…あおげあおげ、ははのみいさお》と母への思慕が歌われる[同:229]。第65「たち花」でも《ちちのみの、父やもうえし、なつかしき、香にこそおえ、よにふるさとの、花のたち花》と父母や故郷への郷愁が歌われる[同:238]。

また、女子道徳を歌う歌もある。第31「大和撫子」では《やまとなでしこ、さまざまに、おのがむきむき、さきぬとも、おほしたててし、ちちははの、庭のおしえに、たがうなよ》と女子としての孝行が奨励される[同:192]。第78「菊」では《露ににたわむや、菊の花、霜におごるや、菊の花、嗚呼あわれあわれ、嗚呼白菊、人のみさをも、かくてこそ》と貞節が菊に託される[同:251]。

他に道徳を説く歌としては、《まことは人の、みちぞかし、つゆなそむきそ、そのみちに》と誠を説く第73「まことは人の道」[同:247]、《月日のかげは、吾身のまもり、空しくなすな、しばしのひまも、勉めよはげめ》と勤勉を奨励する第82「<sup>かしら</sup>頭の雪」[同:262]、《神のおん、国の恩、君の恩、わするな人》と報恩を説く第85「四の時」[同:264]、《よきをみてうつり、悪をみてさけよ、あけに交われば、あかくなるという》と勧善避悪を教える第86「花月」[同:266]などがある。そして、現在まで歌い継がれる第53「あおげば尊し」がある。1番は現行どおりだが、2番は《互にむつみし、日ごろの恩、わかるる後にも、やよわするな、身をたて名をあげ、やよはげめよ、いまこそ別れめ、いざさらば》となっており[同:224]、本来は立身出世を説く歌であった。

最後に、儒教的徳育主義を代表するのは、「五常の歌」と「五倫の歌」である。まず、第32「五常の歌」では「仁義礼智信」の5つの儒教的徳目について、例を挙げて説明する。たとえば、仁については《野辺のくさ木も、雨露の、めぐみにそだつ、さまみれば、仁ちようものは、よのなかの、ひとのこころの、命なり》といったぐあいである[同:193]。伊

沢はこの歌について《忠孝慈敬ノ人生ニ必要ナルヲ述ベ生徒ノ修身上ニ裨益セシメントスル目的ニ出タルモノ也》と解説している[山住:93]。第33「五倫の歌」は短く、《父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり》となっているが[伊沢:195]、この歌について伊沢は《古聖賢ノ格言ヲ生徒ノ心裏ニ銘記セシメントスルノ意ニ出タルモノ也》と説明している[山住:93]。

このように、文部省は欧米から学んだ音楽によって、唱歌を通じて道徳的な精神を涵養することを実践しようとしたのである。

第3のグループは忠君愛国主義である。

まず、第16「わが日の本」は、《わがひのもとの、あさぼらけ、かすめる日かげ、あおぎみて、もろこし人も、高麗<sup>コリア</sup>びとも、春たつきょうをば、しりぬべし》と、国威発揚的な歌である[伊沢:174-5]。また、第27「富士山」のように《外国人も、あおぐなり、わがくに人も、ほこるなり。…富士ちょう山の、みわたしに、しくものもなし、にるもなし》と富士の威容で国威発揚を狙う歌もある[同:27]。

次に、今もよく歌われている第17「蝶々」を見てみよう。最初の唱歌とされているこの歌は、もともとわらべ歌として全国的に普及していたらしく[安田2003:47]、1874(明7)年から翌年にかけて愛知師範学校の校長だった伊沢が、同校教員に集めさせた愛知のわらべうたのひとつが「胡蝶」であった。

当初の歌詞は《蝶蝶とまれ、菜の葉に止れ、菜の葉が枯れたら木の葉に止れ》というものであったが[安田2003:47]、1876(明9)年の「愛知師範学校年報」における伊沢の報告によると、歌詞は《蝶々蝶々。菜ノ葉ニ止れ。菜ノ葉ニ飽タラ。桜ニ遊へ。桜ノ花ノ。栄ユル御代ニ。止レヤ遊べ。遊ベヤ止レ》と変更された[同:47]。そして、『小学唱歌集』の「蝶々」でもちようちよう、ちようちよう、菜の葉にとまれ、なのはにあいたら、桜にとまれ、さくらの花の、さかゆる御代に、とまれよあそべ、あそべよとまれ》となっている[伊沢:176]。先の教員が《『菜の葉にあいたら』の下を代えて今日ある如きもの》にしたと証言しているように[安田2003:47]、伊沢は歌詞を《さかゆる御代に》と代え、ただのわらべ歌を忠君愛国の歌へと変貌させたのである。

伊沢は後年、この歌について次のように懐述している。

皇代ノ繁栄スル有様ヲ桜花ノ燦爛タルニ擬シ、聖恩ニ浴シ太平ヲ楽ム人民ヲ蝶ノ自由ニ舞ヒツ止マリツ遊ベル様ニ比シテ、童幼ノ心ニモ自ラ国恩ノ深キヲ覚リテ之ニ報ゼントスルノ志氣ヲ興起セシムルニアル也。[上沼:104]

このようにして、わらべ歌「胡蝶」は、天皇を中心とする新国家の繁栄の元での国民の自由を強調し、国民に国家への忠誠を促す唱歌「蝶々」へと生まれ変わった。

「蝶々」のように、比喻や象徴を用いて忠君愛国を歌う歌詞は多い。第9「野辺に」では《野辺に、なびく、ちぐさは、四方の、民の、まごころ》と草花が国民の真心にたとえられ、《はまに、あまる、まさごは、君が、みよの、かずなり》と浜砂が天皇の恵みの豊かさにたとえられている[同:168]。第51「春の夜」《霞にきゆるかりがねも、かすかにひびく笛の音も、おさまる御代のしらべにて》[同:220]、第87「治る御代」《治る御代の春のそら、ただよう雲もはれにけり、晴るるみそらの、そのくもは、めぐみの風に、はるるなり》、両歌とも天皇治世下の太平が春がたとえられる[同:268]。

また、第76「瑞穂」では《蒼<sup>あお</sup>生<sup>ひと</sup>の、いのちの種と、かしこき神の、たまへるたねぞ》と[同:249]、第88「祝へ吾君を」では《祝へ吾くにを、みずほのおしねは、野もせにみちて、白かねこがね、花さき栄ゆ、いわえいわえ、君の為め、吾国を》と[同:270]、瑞穂の国の豊穡が天皇の治世を象徴する。

第29「雨露」の《飢えこごえ、なきまどう、民もあるやと、身にかえて…ぬぎたまわせる、大御衣<sup>おおみそ</sup>の、あつきその、御ころあわれ》や[同:190]、第30「玉の宮居」の《民をおもおす、みこころに、大御衣<sup>おおみころも</sup>や、ぬがせまたいし》では、天皇の慈愛が国民をつつむ衣にたとえられている[同:190-1]。けれども、慈愛は同時に忠誠を求める。第44「御国」では《すめらみくにの、もののふは、いかなる事にをか、つとむべき、ただ身にもてる、まごころを、君と親とに、つくすまで》と[同:211]、第45「栄行く御代」では《さかゆく御代に、うまれしも、おもえば神の、めぐみなり、いざや児等、神の恵を、ゆめなわすれそ》と、天皇への忠誠が強要される[同:212]。

ところで、この唱歌集には第23「君が代」も採録されている。

一 君が代は、ちよにやちよに、さざれ	二 きみがよは、千尋の底の、さざれ
いしの、巖となりて、こけのむす	いしの、鵜のいる磯と、あらはるる
まで、うごきなく、常磐かきはに、	まで、かぎりなき、みよの栄を、
かぎりもあらじ。	ほぎたてまつる。 [同:183]

歌詞が現行の「君が代」とは異なるだけでなく、当時は国歌的扱いも受けておらず、メロディも異なるものだった。

実は、「君が代」に類似した歌は他にも数多く収録されている。たとえば、第4「いはへ」《いはえへ、いわえ、きみが代いわへ》[同:165]、第5「千代に」《いませ、いませ、わが君ちよに》[同:166]、第25「薫りにしるゝ」《きみが代いわいて、幾春までも、かおれやかおれや、うたえやうたえ》[同:186]、第46「五日の風」《豊茅原<sup>とよあしはら</sup>の、みづ穂のくには、ちよろず世も、うごきなき国、わが君が代は、千代よろづ代も、動きなき御代、いわえもろ人》[同:214]、第48「太平の曲」《おさまる御世は、あめつちさえも、とどろ

くばかり、万代までと、君が代いわえ》[同:216]、第50「やよ御民」《やよみたみ、稲をうえ、井の水たたえ、君がよは、はらづつみうち、身をいわえ》[同:219]などである。

このように、全体のおよそ4分の1が忠君愛国歌である『小学唱歌集』は、いわば天皇に対する「賛美歌集」という側面も有している。

4番目のグループは軍国主義である。

まず、第20「蛍」から取り上げたい。1、2番は現行の「蛍の光」と同じだが、現在歌われることのない3、4番の歌詞は下記のようにになっている。

三 つくしのきわみ、みちのおく、 四 千島のおくも、おきなわも、  
うみやまとおく、へだつとも、 やしまのうちの、まもりなり、  
そのまごころは、へだてなく、 いたらんくくに、いさをしく、  
ひとつにつくせ、くのために、 つとめよわがせ、つつがなく、 [同:179]

3番では、筑紫の極み・鹿児島県から陸奥・東北までもが心をひとつにして国のために尽くせと歌われる。4番の《千島の奥》は、1875(明8)年の「樺太・千島交換条約」が念頭にある、と小川和佑は指摘している[小川:56]。この年、日本は樺太とカムチャッカまでの千島列島を交換した。そのため《日本の最北端はカムチャッカ半島を望むシムシム島となった》のである[同]。また、1879(明12)年、琉球王国が統合されたことが、《おきなわも》の歌詞には反映されている。このように、「蛍」の日本の支配圏を意識したものであった。

さらに、1873(明6)年には徴兵制度がしかれており、小川の指摘するように、卒業式に歌われることを目的として作られたこの歌には、《やがて兵士となって国防の第一線に立つことを自覚》させる意図が込められている[同:57]。このように、「蛍の光」は、本来、学校を巣立ち、戦に赴く兵士を送る歌なのである。

「蛍」と同じ趣向の曲に第18「うつくしき」がある。ここでは、《うつくしき》上の子は《ゆみとりて、君のみさきに》、中の子は《太刀帯<sup>はき</sup>て、君のみもとに》、末の子は《ほことりて、きみのみあとに》、それぞれ《いさみたちて、わかれゆきにけり》と[伊沢:177]、親が《うつくしき》わが子を天皇のいくさに送り出す姿が歌われる。

第42「遊獵」では《ますらをなれや、み獵たたせる、そのいさましさ》と[同:209]、第71「鷹狩」では《いさめる君、すわや狩場に、ゆけゆけゆけ》、《犬はかり場を、かれかれかれ、鳥ぞむれたつ、それぞれそれ》と、いくさが狩りに仮託される[同:245]。第69「小枝<sup>さへだ</sup>」では《小鳥さえ、礼はしる》《犬さえも、恩はしる》《君にもつかうる。ますら男よ、身をつくせ》と忠臣が奨励され、いくさで《身をつく》して戦うことが強要される[同:243]。そして、第61「古戦場」では《屍は朽て、骨となり、刃はおれて…命を捨て、ますら男が、

その名は千代も朽せじな》[同:232]、第79「忠臣」では《さくら花、散りはてて、世にこそかおれ、そのうたと其まこと》といずれも忠臣の死が讃えられる[同:252]。この「忠臣」について、伊沢は《忠孝慈敬ノ人生ニ必要ナルヲ述ベ生徒ノ修身上ニ裨益セシメントスル目的ニ出タルモノ也》と解説している[山住:93]。

最後に置かれている唱歌は第91「招魂祭」である。

一 ここに祭るきみがたま。蘭はくだけで 二 ここにまつる、戦死の人、骨を砕くも、  
香に匂い、骨は朽ちて、名をぞ残す、 君がため、国のまもり、世世のかがみ、  
代物、うけよきみ、 ひかり絶せじ、其光、 [伊沢:276]

1872(明3)年、東京招魂社(現靖国神社)において戊辰戦争で亡くなった3588名のための招魂式が挙行され、その翌日から5日間にわたり招魂祭が行われた。この歌は明治政府樹立に尽くした死者への鎮魂歌として作られたのだ。

このように、『小学唱歌集』には数は多くないが、軍国主義的な唱歌が含まれている。これらの唱歌、そして『新体詩抄』の「抜刀隊」から、後に幾多の軍歌が生まれていくのである。

以上、唱歌集の歌を4つのグループに分けて考察してきたが、2つ以上のグループにまたがる歌もある。とりわけ、叙情性は全体を通じての特徴であり、徳育も忠君愛国もいくさも、そういった叙情性に乗せて歌い上げられる。唱歌は、叙情性の衣に包みつつ、徳育主義や愛国心を育み、最終的には天皇のいくさに嬉々として赴く「国民」を育て上げるために作られたのである。

## 結論

「箱根の山は天下の剣」の作詩で知られる、音楽取調掛第1回伝修生・鳥居<sup>まこと</sup>枕(1853-1917)は、1887(明治20)年の千葉県教育会の講演において、こう証言している。

当今東京では帝国大学出身の学士や学生の人々には何か立食とか集会とか致す場合には下手なり「蛍の光」や「思い出れば」位は知らないと言唱して居る所で独りボンヤリとして何だか肩身が狭い様な傾きがあります此様子では数年の後は音楽唱歌を知らない者は自然と人中へ出る事が出来ない様になりませふ[田甫:45-6]

このように、当時、唱歌は、唱歌教育を受けていない者でさえもがその存在を知るところとなっていた。

『小学唱歌集』は、明治40年代にいわゆる「文部省唱歌」が作られるまで、ほとんどす

すべての小学生が手にすることとなり、その精神は国民の心の奥深くに刻まれてゆく。『小学唱歌集』は、愛国精神を涵養するために国策として作られたものであり、叙情性に彩られた歌詞を通して、国民に徳育主義、忠君愛国主義、軍国主義を注ぎ込むことに成功した。こうして国民化された「詩人」たちが、後の世に多くの「国民詩」を送り出していくことになる。

西川長夫は、こう指摘する。

明治期の「文明開化」の例でもわかるように、国民化は一般に文明化の形をとる。基本的な事情は欧米の場合も第三世界の場合でも同じであろう。だが国民化は、学校や軍隊や工場や宗教や文学や、その他あらゆる制度や国家装置を通じて、究極的には国家の原理を体現した国民という改造人間を作り上げる。そのような国民化が国民国家の時代を通して進行し、現在に至っていることに、すでに国民化されたわれわれは気がつかない。

[西川:15]

21世紀を迎えた現代においてさえ「蛍の光」や「あおげば尊し」に思わず涙ぐんでしまうことがあればと、「唱歌」が《国家装置》として「優秀」であることを実感するとともに、《改造》され、《国民化》された自らに震撼せざるを得ないのである。

## 参考文献

- 伊沢修二（1971）山住正己校注『洋楽事始』平凡社
- 小川和佑（2005）『唱歌・賛美歌・軍歌の始源』アーツアンドクラフツ
- 奥中康人（2008）『国家と音楽—伊沢修二がめざした日本近代』春秋社
- 尾崎護（1998）『低き声にて語れ—元老院議員・神田孝平』新潮社
- 上沼八郎（1962）『伊沢修二』吉川弘文館
- 江崎公子編（1991）『音楽基礎研究文献集・16巻』大空社
- 倉田善弘（2002）『近代歌謡の軌跡』山川出版社
- 斉藤勇（1962）『賛美歌研究』研究社出版
- 澤崎眞彦（1991）「我が国初の学校唱歌」江崎公子編『音楽基礎研究文献集・別巻』大空社
- 山東功（2008）『唱歌と国語—明治近代化の装置』講談社
- 田甫桂三編（1980）『近代日本音楽史Ⅰ』学文社
- 手代木俊一（1999）『賛美歌・聖歌と日本の近代』音楽之友社
- 中村洪介（2003）林淑姫監修『近代日本洋楽史序説』東京書籍
- 中村理平（1993）『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』刀水書房
- 西川長夫（1998）『国民国家論の射程』柏書房

文部省音楽取調掛編（1882）『小学唱歌集・初編』文部省

安田寛（1993）『唱歌と十字架—明治音楽事始め』音楽之友社

安田寛（2003）『「唱歌」という奇跡・十二の物語—賛美歌と近代化の間で』文芸春秋

山住正己（1967）『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会

